

現実性と実在性の差異  
——「現実的生活過程論」の展開へ

大阪労働学校

2022.07.27

田畑 稔

# 田畑稔(1942～)自己紹介

季報『唯物論研究』編集長  
(創刊1981年～現在155号)  
大阪哲学学校世話人  
(創立1986年～)  
21世紀研究会(2001年～18年)

『マルクスとアソシエーション』1994  
『マルクスと哲学』2004  
増補版『マルクスとアソシエーション』2015  
共編著『21世紀のマルクス』2019  
大阪哲学学校編『生きる場からの哲学入門』2019

思想家  
哲学者  
編集者

大阪大学・大学院哲学科(1962-72)  
富山大学教養部(1974-79、哲学)  
広島経済大学(1998-2002、倫理学)  
大阪経済大学人間科学部  
(2002-2012、人間論、哲学)

ドイツ哲学研究(主にヘーゲル)  
マルクス再読(1981～)  
「生活の吟味」としての哲学  
思想の現状分析  
生活過程論

# マルクス思想の 「19世紀問題」「20世紀問題」「21世紀問題」

## (1)「19世紀問題」

ML主義の縛りを解いて、マルクスの画期的意義と歴史的限界を彼が生きた現実 に即して再読する

## (2)「20世紀問題」

1917年2月と10月のロシア革命から1991年の「ソ連邦崩壊」にいたるいわゆる「ソ連型社会主義」をどう総括するか

## (3)「21世紀問題」

人類史的課題山積の現状に対するオルタナティブの実践的構築においてマルクスから何を摂取し、マルクスをどの方向に「開く」べきか

# マルクス「生活過程」全体図(暫定)

## I. 「総過程」

「現実的生活過程」 現に作動しつつある存在様相下に見られた「総過程」

「社会的(gesellschaftlich)生活過程」 単位社会における「総過程」

「歴史的生活過程」 マクロな変容過程として見られた「総過程」

## II. 「生命過程」 人間たちの「生活過程」の地盤(element)をなす過程

地球環境下の生命史的生態学的過程

ヒトおよび「身体的生活過程」(生理学的身体過程)

## III. 「部分過程」 その端初規定

「物質的生活過程」生活諸手段の生産・分配・交換・消費の行為・構造・過程

「社会的(sozial)生活過程」 人間たちの相互諸行為、その構造・過程

「政治的生活過程」 「社会の公的総括」の行為・構造・過程

「精神的生活過程」 認識、価値判定、行為コントロールの活動・構造・過程

## IV. 「[個人的]生活過程」

「総過程」を〈織り込み〉つつ営まれる人格的(persönlich)生活過程

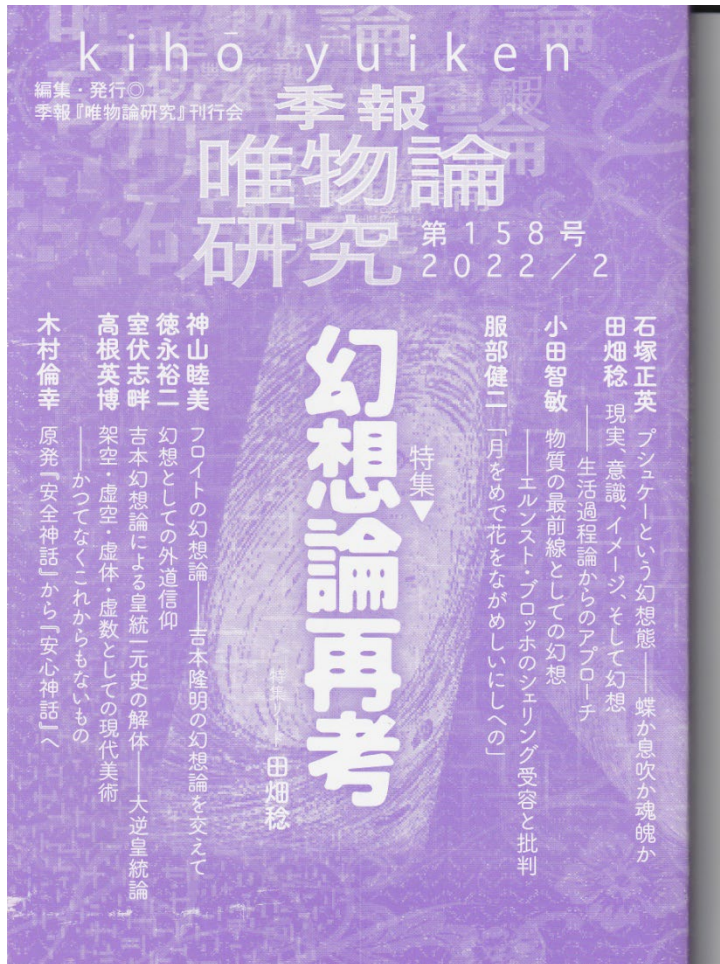
# 第1部

現実性 (Wirklichkeit, actuality) と  
実在性 (Realität, reality)

の区別について

マルクス「現実的生活過程」論の展開へ

# [2022.02]「現実、意識、イメージ、そして幻想」 季報『唯物論研究』158号



- (1)「現実的生活過程」論の展開へ
- (2)現実性(Wirklichkeit)と実在性(Realität)の混同を克服する
- (3)レーニン『唯物論と経験批判論』は実在論の主張にとどまっている
- (4)グラムシは「現実性」ベースで「実践の哲学」を構想していることを確認する

## フイエルバッハ・テーゼ1(1845)

「すべてのこれまでの唯物論(フイエルバッハのそれを含め)の主要欠陥は、対象(Gegenstand)、**現実**(Wirklichkeit)、感性(Sinnlichkeit)がただ客体の、あるいは直観の形式のもとでだけとられ、感性的人間的な活動、実践として、主体的にとられない点にある。したがって活動的側面は、唯物論に対立して、観念論—当然、**現実的感性的活動**をそれ自体としては知らないところの—により抽象的に展開されている。フイエルバッハは感性的な—思想諸客体から**現実的**に区別される諸客体を欲する。だが彼は人間的活動自身を対象的な(gegenständlich)活動としてとれない。」

マルクスは「感性的人間的な活動、実践」、つまり人間的質をもつ感性的対象的活動、実践に着目し、これに「現実」を重ねている。

# マルクスの「現実」概念の整理

- (1) 「感性的人間的活動、実践」の連鎖し、交差し、構造化され、変容もする過程を、現に作動中の(wirkend)の存在様相において把握する概念が「現実」である。
- (2) 日頃用いている言葉を列記すれば、諸行為(actions、Handlungen)、諸反応・諸反応行為(reactions、Reaktionen)、相互作用・相互行為(interactions、Wechselwirkungen)、反対行為(counteractions、Entgegenwirkungen)、取引(transactions)、共同行動(joint actions)などの連鎖・交差する過程を、現に作動中(wirkend)の存在様相において把握するのである。
- (3) したがって「生活過程」と「現実」概念は直結している



# 現実性、可能性、必然性、偶然性、(創発性)

## (1) 狭義の「現実性」

目的(「可能」)が、「必ず」、あるいは「たまたま」「実現」する(「現実」化する)という場合、「現実性」は可能性や必然性や偶然性と対置されて用いられる。しかしこの「実現したもの」もaction-reaction-interactionの連鎖交差の渦中に存在し続ける。

## (2) 広義の(本来の)「現実性」

action-reaction-interactionの連鎖交差し、構造や生成も含む過程を現に作動中の存在様相でとらえる概念であって、当然、可能性や必然性や偶然性(や創発性)を包摂している。

こういう広狭区別はヘーゲル『論理学』でもN・ハルトマンの『可能性と現実性』(1937)でも確認できる。

# 「現実」「自然」「実在」

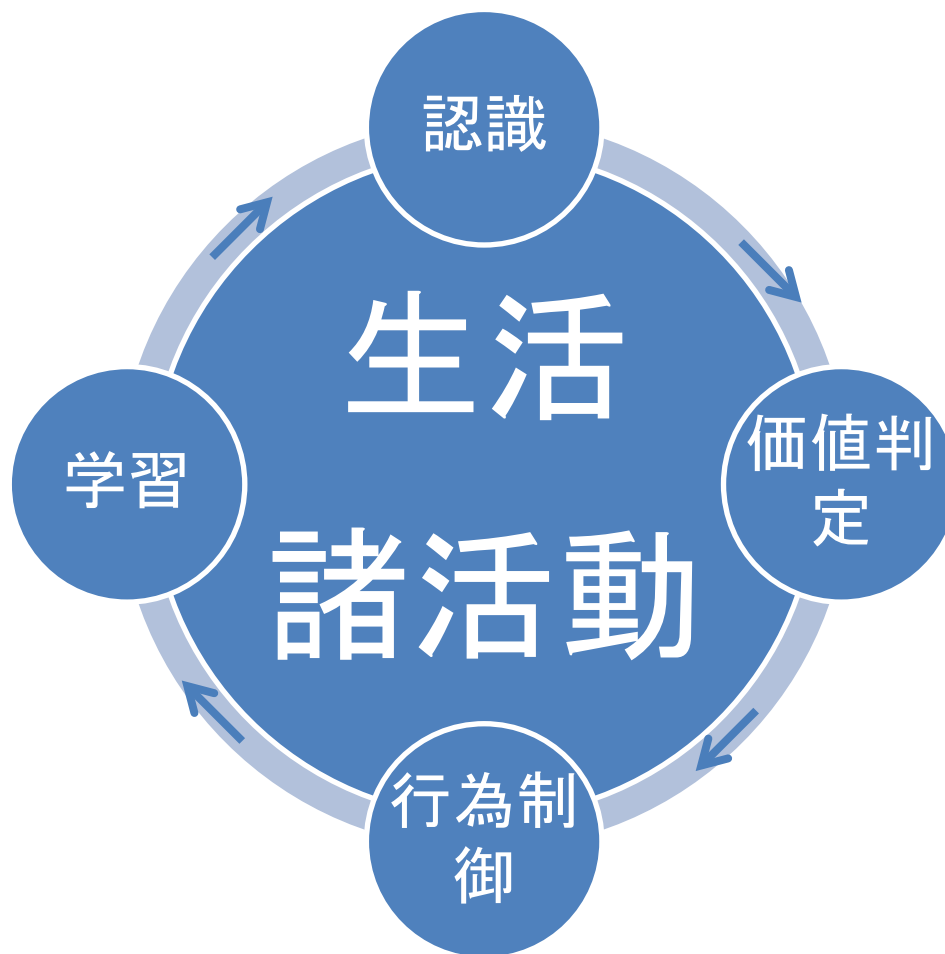
- (1) 他者や集団だけでなく、環境的自然や主体的自然(生理学的身体過程)も生活過程の地盤、前提、活動対象、条件として、このactionsやreactionsの作動しつつある「現実」過程を構成している。
- (2) 太陽系の中の「生命の家」としての、また高度文明が根づいている「場所」としての地球。昼夜や四季(太陽と地球の相対位置変化)は地上の生命の時間(変化・活動リズム)を、重力は身体運動を、地表の諸物質は生命の物質代謝を、根源的に条件づけている。
- (3) 近くの天体の地球衝突は人類絶滅の最大のシナリオである。
- (4) 情報革命の急進展で光速超ミクロの物理過程も現実的生活過程に組み込まれつつある。
- (5) だが膨張宇宙や2000億に上るとされる銀河やそれを構成する無数の星たちは「実在する(real)」が、少なくとも今日の間人たちにとって「現実的(wirklich)」なのではない。人間たちの「現実」の遠い遠い周辺部にあって、それらとの「微かな相互作用」を確認するため巨大装置と巨額を投じて一部専門家が探究中であるにすぎない。
- (6) 例えばカルト集団の幻想意識は①信念内容が「非実在」だが、②靈感商法や反共アクションなどを構成するものとして極めて「現実的」である。
- (7) 「実在」概念は最愛の他者にも、遠い遠い銀河にも妥当し、両者の区別に無関心である。「現実」概念から見るとこういう無関心はありえない。

# マルクスの「意識論」

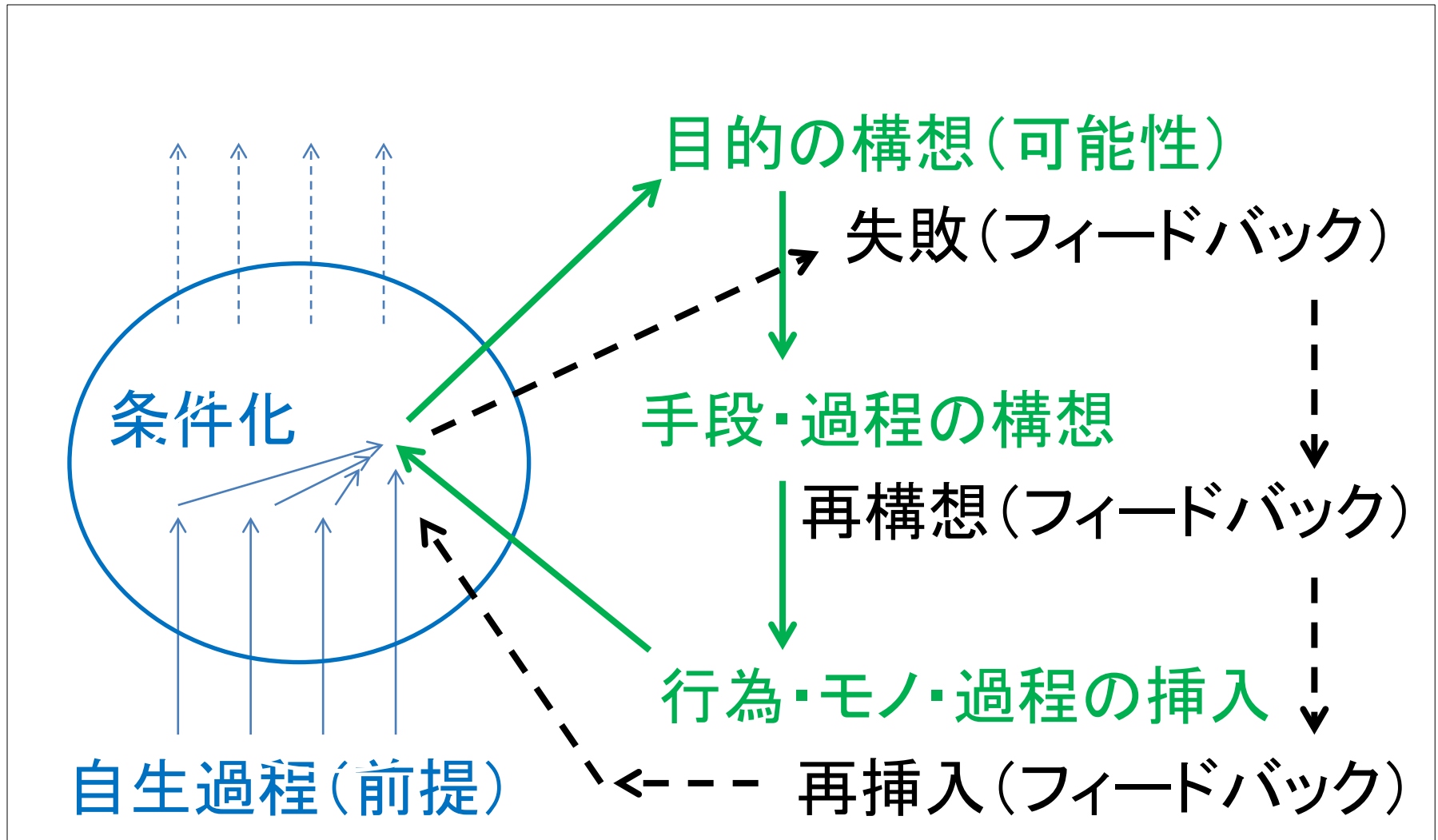
- (1) マルクスのように人間たちの生活過程を原理的位置に置くと、「意識」のとらえ方も根本的に変わってくる(拙著『マルクスと哲学』2004, 第2章)。
- (2) 「意識(das Bewußtsein)とは意識的な存在(das bewußte Sein)以外の何物でもなく、そして人間たちの存在とは彼らの現実的生活過程(ihr wirklicher Lebensprozess)のことなのである」(『ドイツ・イデオロギー』フョイエルバッハ章「5. [断片]」)。
- (3) 意識は生活活動とは別の何かではなく、生活活動自身を対象とし〈つつ〉生活活動を営むという、生活活動自身の「このあり方」がdas Bewußtsein＝「意識的な存在(das bewußte Sein)」＝意識的な「現実的生活過程」なのである。
- (4) 熟睡時を除いて人間たちは自分たちの生活活動を「対象とし〈つつ〉」生活活動を営んでいる。動物たちもある範囲で同じであるが、マルクスが焦点をあてているのは「感性的人間的活動、実践」であって、当然、感性的実践の「人間的」な質も展開されねばならない。

# 意識の諸機能

覚醒・注意時の高速回転作動イメージ図



# 実践(労働や相互行為)と学習の図式化



刺激状況の発生



状況認知と意味づけ



怒りの感情の発生



↓壊れる 未形成↑↑

抑制メカニズム

攻撃反応



↓事後処理

他者の反応



# 第2部

「実在論 (Realismus)」問題の文脈

# 「実在論 (realism)」の哲学的意味

## (1) 中世哲学「実在論 (実念論) vs 唯名論」

「普遍は実在する」(アンセルムス、1033-1109)

「普遍は単なる言葉である」(オッカム、1285-1347)

## (2) 近代哲学の「実在論 vs 観念論」

物や対象は単なる「表象」「観念」でなく、それ自体としての存在を持つ(実在論)

G.バークリー「観念論」:「ある」とは「知覚されている」ということで、知覚の中には「我々の表象・観念以外の何もない」

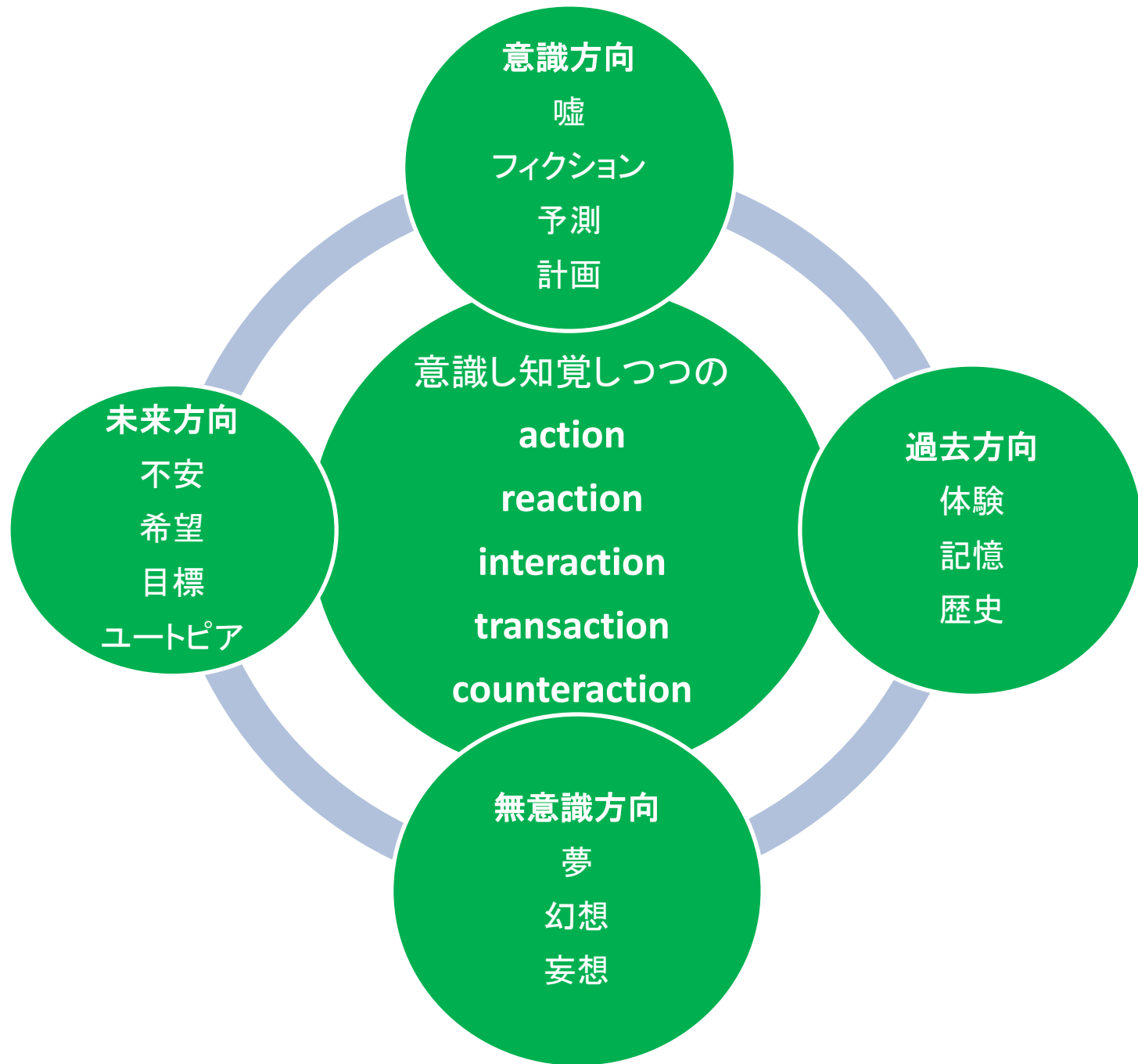
ドルバック『自然の体系』第1部第3章「我々にとって物質一般とは何らかの仕方で我々の感官を触発するすべてのものである」

## (3) ヘーゲル『精神の哲学』の想像(表象)論

感性的直観—記憶—想起—連想—空想—記号—思考



# 現実とイメージ諸形態



# マルクスとレーニンの「物質概念」の差異

## (1)レーニン『唯物論と経験批判論』(1908)

「物質とは意識から独立にあり意識により反映される客観的  
実在である」

「意識は独立な物質の反映である」

## (2)マルクスの物質概念は「物質的生活過程」

- ①生命や生活の再生産に必要な生活手段(財やサービス)の生産、分配、交換、消費の過程
- ②単なる「実在」過程でなく、actions-reactions-interactionsの連鎖交差する「現実」過程である

[1992.02]田畑稔「マルクスとレーニンの差異について——レーニン哲学におけるマルクス不在問題」『社会主義理論学会年報』創刊号

# 「現実性」が「実在性」を根拠づける、逆ではない

(1) バークリーのような「実在性否定」論が可能なのは知覚主体が「脱身体化entleiblichen」した状態を意図的にあるいは無意図的に設定しているからである。

(2) たとえば「太陽は我々の観念に過ぎないか」バークリーと一緒に実際、太陽を知覚してみる→目がまぶしい→目が痛い→目が見えない。知覚対象との関係に「急変Umschwung」、つまり太陽-網膜interactionが急浮上する。

(3) このようにして知覚が太陽と身体主体である私のaction-reaction-interaction過程であることが確認できる。

拙著『マルクスと哲学』新泉社、2004、第2章[3]「マルクスにおける実在論の問題」参照

# 第2部

グラムシにおける「現実」と「実在」

# 「歴史的唯物論」＝「行為(実践)の哲学」＝「具体相における人間の活動(歴史)」

Q41134A「このような諸条件下で「一元論」はどう把握されねばならないか。明らかに唯物論的一元論でも観念論的一元論でもなく、「物質」でも「精神」でもなく、「歴史的唯物論」、つまり具体相における人間の活動(歴史) (attività dell'uomo (storia) in concreto)、つまり特定の組織された「物質」(物質的生産諸力)に、人間により加工された「自然」に適用された人間の活動(歴史)である。行為(実践)の哲学 (filosofia dell'atto (praxis)) は、しかし「純粋な行為」の哲学ではなく、「不純な」、つまり平凡な意味での現実的行為 (atto reale) の哲学なのだ。」

Q11164C「この場合「一元論」という用語は何を意味するのか。然り、唯物論的一元論でも観念論的一元論でもなく、具体的歴史的行為における対立の同一性、つまり具体相における人間の活動.....である。行為(実践、発展)の哲学、ただし「純粋な」でなく、平凡なもっとも通俗的な意味で現実的であるような行為の哲学なのだ」

# 「客体的なもの」の形而上学的-唯物論的概念

Q11¶17「客体的なもの(oggettivo)」に関する形而上学的-唯物論的概念は、どうも人間の外部にも存立する客体性を意味するらしい。だがある實在(una realtà)が、たとえ人間が現存しなくとも、現存するのだと主張する場合、隠喩をやっているのか、神秘主義の形式に陥っているかのどちらかだ。我々は人間との関係においてのみ實在性を知るのだ。そして人間は歴史的な生成であるから認識や實在性もまた生成であり、客体性もまた一つの生成なのだ。」

(田畑コメント)グラムシがマルクスを「実践の哲学」として、つまり「生活過程」や「現実的人間活動、実践」や「現実性」の概念を基軸に置いて理解しようとしていることは正しい。ただここではグラムシは「現実性」と「實在性」を区別できていない。むしろ「現実性に足場を置く場合にのみ、「實在性」を確証できるのであって、逆ではないと言うべきであった。

# 「隠れた神」vs「その中で現実の人間たちが運動し作動する社会的諸関係の総体」

Q10-I-¶8「もし構造概念が「思弁的」に把握されると、確かにそこから「隠れた神」が生成する。だが構造概念は歴史的に、その中で現実の人間たちが運動し、作動する (in cui gli uomini reali si muovono e operano)、社会的諸関係の総体として、客観的諸条件の総体として把握されるべきだ。...実践の哲学は単に内在主義[超越的なものの克服]と連関するだけでなく、主体的現実把握とも連関している。それを転倒し、歴史的な事実として、「社会集団の歴史的主体性」として説明するかぎりにおいて。...実践の哲学は現実の歴史主義的な把握 (la concezione storicistica della realtà)なのだ。」

## 第3部

# グラムシの「知的モラル的改革」



# 松田博『グラムシ「未完の市民社会論」の探究 ——『獄中ノート』と現代』

- (1) national editionによるグラムシ研究更新
- (2) 「未完」の強調。つまりグラムシ研究の
  - ① 20世紀問題(グラムシが生きた世界、グラムシ自身の活動や著作の内在研究)と
  - ② 21世紀問題(21世紀のオルタナティブの実践的構築に向けグラムシをどう「開いて」いくか)を区別。
- (3) 「市民社会」「ヘゲモニー」「知的道徳的改革」「サバルタン」「有機的知識人」「アソシエーション」



# 季報『唯物論研究』119号(2012.05) 「グラムシと「知的モラル的改革」」特集

## 第1部

グラムシの「知的モラル的改革」論

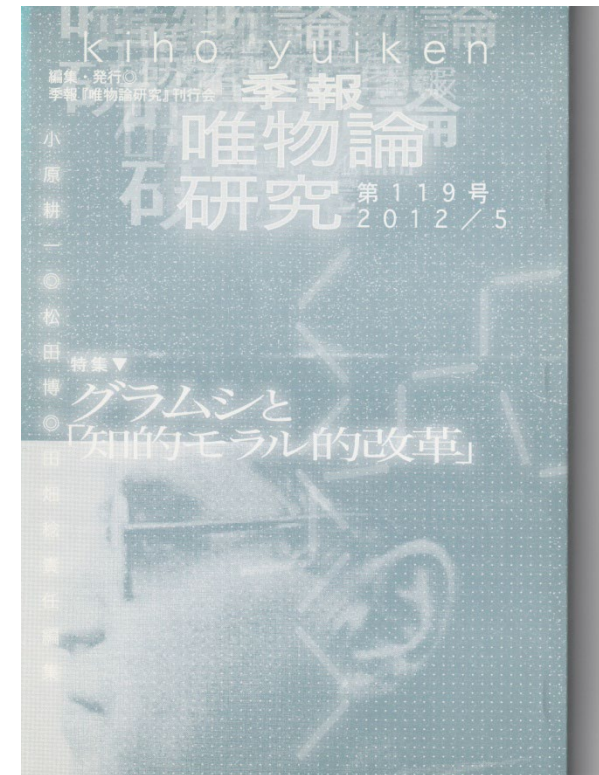
小原耕一、松田博、田畑稔(上のみ)

## 第2部(小原、松田訳)

グラムシ『獄中ノート』の「知的モラル的  
改革」関連草稿(9つの基本草稿)

## 第3部 関連ドキュメント(小原訳)

プルドン『革命における正義と境界に  
おける正義——実践哲学の新しい諸  
原理』(1858)「目次」と「概要」



季報『唯物論研究』、小原耕一訳  
「GRAMSCI「知的モラル的改革」関連ドキュメント」

- 77号(2001.08)クローチェ「宗教と心の平静」  
93号(2005.08)クローチェ「哲学者」  
99号(2007.02)ジョルジュ・ソレル「エルネストルナンのドイツ精神と歴史主義」(上)  
100号(2007.05)ジョルジュ・ソレル「同」(下)  
101号(2007.08)エルネスト・ルナン「知的モラル的改革」(上)  
102号(2007.11)エルネスト・ルナン「同」(中)  
103号(2008.02)エルネスト・ルナン「同」(下の1)  
105号(2008.08)エルネスト・ルナン「同」(下の2)  
なおトロッキー「マサリク教授のロシア論」(1914)「革命前夜のロシア」(1918)「ロシア文明の精神」(1920)も参考資料として重要

## グラムシ「知的モラル的改革」論の課題

- (1) ルナン、ソレルの「知的モラル的改革」の具体的文脈
- (2) プルードン「教会の正義」vs「革命の正義」
- (3) トロツキー「ロシア」の文化革命の課題
- (4) グラムシはイタリアの「知的モラル的改革」をどう構想していたか
- (5) グラムシ「実践の哲学」で「知的モラル的改革」はどんな位置を占めているのか
- (6) 21世紀の世界で、また現在の日本で「知的モラル的改革」は具体的にどのように提起されべきか